

スコットランド軍が  
劇的勝利をおさめてから710年

## 古戦場

# バノックバーン を征く【前編】

スコットランドとイングランド。  
現在は「連合王国」を形成する隣国同士だが永遠の宿敵でもある。  
いや、イングランドに虐げられる時代の長かったスコットランドから見れば  
憎き仇（かたき）と呼ぶべきかもしれない。  
それだけに、710年前、スコットランド軍がスターリング郊外で  
イングランド軍に対して鮮やかな勝利をおさめたことは  
スコットランド人にとって今も大きな誇りであり続けている。  
今号と来週号では、その戦いの地、バノックバーンを征くことにしたい。

### 勝利を呼び込んだ一撃

「落ち着け、相手の動きをよく見るの  
だ」

1314年6月23日。スターリング  
近郊のバノックバーンで、スコットラ  
ンド王ロバート1世ことロバート・ザ・  
ブルース (Robert the Bruce) は自分  
にそう言い聞かせていた。

目の前には、イングランド軍の騎兵  
隊に属する一人の騎士が立ちはだかっ  
ている。まだ本格的な戦闘は始まって  
いなかったこともあり、スコットラン  
ド軍を率いるロバートは、この時、敵  
の先鋒隊がここまで来るとは予想して  
おらず、軽装で愛馬の軽量馬にまた  
がっていた。

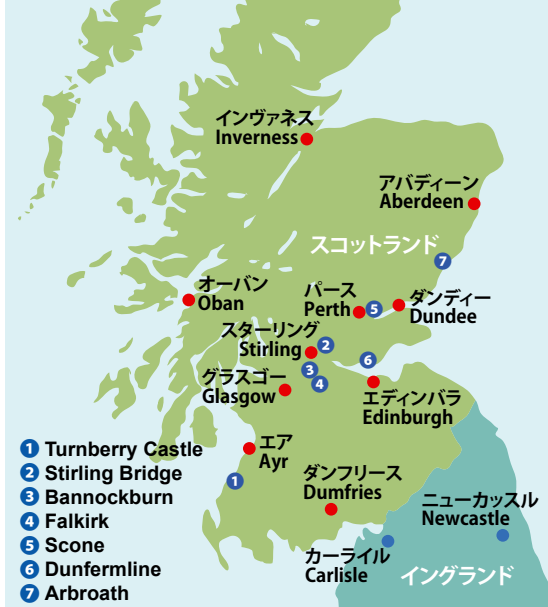
相手は完全装備。ひと目で、かなり  
位の高い人物であることが分かった。  
騎士の名はヘンリー・ドウ・ボーン  
(Henry de Bohun)、ヘレフォード伯爵  
の甥である。

ロバートの頭部を守る甲冑に、シン  
プルながらも王冠をかたどった装飾が  
施されているのを目ざとく見つけた  
ボーンは、功を急ぐ若者らしく、ロ  
バートに一騎打ちを挑んできたのだっ  
た。ロバートが携えていた武器は戦闘  
斧のみ。斧を握る右手が、じつとりと  
汗ばんでくるのを感じた。

意識を集中して冷静に間合いを計っ  
ていたロバートに向かって、まもなく、  
騎士が仕掛けてくるのが見えた。馬の  
スピードは見る見るうちにあがり、ふ  
たりの距離はまたたく間に縮まった。  
次の瞬間、ロバートは急に向きを変え、  
あぶみの上に立ちあがった。その右手  
が鋭く空を切ったかと思うと、斧は騎  
士の脳天から入り、騎士が地面に倒れ  
落ちる鈍く重い音が響き渡った。まさ  
に必殺の一撃だった。

後に、「バノックバーンの戦い」と呼  
ばれる、スコットランド軍対イングラ  
ンド軍の戦いの初日に起こったこのア  
クシデントは、スコットランド軍兵士  
の士気を大いに高めた。

翌日の24日、同軍は圧倒的な勝利を  
収め、この710年で、イングランド



スコットランドに領地を与えられた貴族たちは、スコットランド王の座をめぐる激しい争いを繰り広げることになる。この権力闘争があまりに熾烈だったため、スコットランドとして一丸になるのが難しく、イングランドにつけいる隙を多分に与えたのだ。

ロバート・ザ・ブルースの母は、キャリック伯の領地と称号を相続していた女性当主、マージョリー。ロバートの父親に自分から求婚、それが受け入れられるまでロバートの父親を閉じ込めたという逸話が残されているほど、気の強い女性だった。その長男として産声をあげたロバートが、祖父、父からスコットランド王即位への夢を託され、リーダーとなるための教育を施されたであろうことは想像に難くない。1292年、母親の逝去にともない、ロバートは18歳でキャリック伯爵家を継ぎ、第2代キャリック伯となる。

これにさきだち、スコットランドは混乱という名の黒い大波にのみまわれていた。『聖人』の異名をとったデヴィッド1世（在位1124〜1153年）の流れをくむ、アサル王家が1290年に断絶したことが発端だったが、この断絶騒ぎも不運の連続の末に訪れた結果だった。アサル王家の最後の王となった、アレグザンダー3世（在位1249〜86年）は、嵐の中、若き2番目の妻、ヨランドのもとへと旅路を急いだばかりに馬から振り落とされ、唯一の直系であった孫娘、ノルウェー王女マルグレートに王位を譲ると遺言した。

わずか3歳で、スコットランド初の女王、マーガレットとして即位したままでは良かったが、1289年、ノルウェーからスコットランドへと向かって出帆した船は大しけにあり、オークニー島にたどりついたところでマーガレットはことごとく死んでしまう。7年という短い生涯だった。

統一を遅らせた権力闘争

パノックバーンが戦場となる8年前に即位し、ロバート1世（Robert I 在位1306〜29年）を名乗るようになったロバート・ザ・ブルースは、1274年7月11日に誕生、スコットランド西部エアシャーのターンベリー城で育った。

父親は後に第6代アナンドール卿となるロバート・ドゥ・ブルース（Robert de Bruce）。この苗字から推測できるかもしれないが、ブルース家はもともと、ノルマンディ公ウイリアムによるイングランド征服が行われた際、フランスのノルマンディ地方からともに英本土へと渡ってきた貴族のひとつ。このブルース一族をはじめ、11世紀以降、ス

スコットランドに領地を与えられた貴族たちは、スコットランド王の座をめぐる激しい争いを繰り広げることになる。この権力闘争があまりに熾烈だったため、スコットランドとして一丸になるのが難しく、イングランドにつけいる隙を多分に与えたのだ。

ロバート・ザ・ブルースの母は、キャリック伯の領地と称号を相続していた女性当主、マージョリー。ロバートの父親に自分から求婚、それが受け入れられるまでロバートの父親を閉じ込めたという逸話が残されているほど、気の強い女性だった。その長男として産声をあげたロバートが、祖父、父からスコットランド王即位への夢を託され、リーダーとなるための教育を施されたであろうことは想像に難くない。1292年、母親の逝去にともない、ロバートは18歳でキャリック伯爵家を継ぎ、第2代キャリック伯となる。

これにさきだち、スコットランドは混乱という名の黒い大波にのみまわれていた。『聖人』の異名をとったデヴィッド1世（在位1124〜1153年）の流れをくむ、アサル王家が1290年に断絶したことが発端だったが、この断絶騒ぎも不運の連続の末に訪れた結果だった。アサル王家の最後の王となった、アレグザンダー3世（在位1249〜86年）は、嵐の中、若き2番目の妻、ヨランドのもとへと旅路を急いだばかりに馬から振り落とされ、唯一の直系であった孫娘、ノルウェー王女マルグレートに王位を譲ると遺言した。

わずか3歳で、スコットランド初の女王、マーガレットとして即位したままでは良かったが、1289年、ノルウェーからスコットランドへと向かって出帆した船は大しけにあり、オークニー島にたどりついたところでマーガレットはことごとく死んでしまう。7年という短い生涯だった。

この不運続きのアサル王家の跡を継ぐのは誰か。

名乗りをあげたのは13名もの『近親者』たちだった。このうちのひとり、ロバート・ザ・ブルースの祖父、ロバート・ブルース（ザ）がない点に注意）。最大のライバルは、血筋の上ではより『正統』とされるジョン・ベイリオル（John Balliol）だったが、ここでスコットランド側は取り返しつかぬ過ちをおかしてしまふ。

内戦勃発を恐れるあまり、あるうことか、宿敵イングランドのエドワード1世に『審判』役を依頼したのである。飛んで火に入る、とはまさにこのこと。大軍を率いて北上したエドワード1世の前に、統率がとれず、対立したままのスコットランド貴族たちはいいなりになるしかなかった。結果的に、ベイリオルが即位するが（在位1292〜96年）、エドワード1世の傀儡（かいらい）でしかなかった。

ベイリオルは、当初こそ、エドワード1世の要求を受け入れていたものの、1294年、他のスコットランド貴族たちがエドワード1世に反旗を翻してフランスと同盟を結んだこともあり、みずから1296年、挙兵した。しかしながら、エドワード1世軍に大敗。スコットランド王が代々、戴冠す際の『座』として使われてきた、スクーン宮殿の「運命の石（The Stone of Destiny）」を奪われてしまう。

「運命の石」までも失い、王位を捨てることになったベイリオルは、イング

スコットランドを完全に支配下に置こうと画策するエドワード1世にまづ一矢を報いたのは、王権争いには直接には関係のない2人の騎士だった。一人はウイリアム・ウォリス（William Wallace 1270頃〜1305年）、もう一人はアンドリュウ・モーレイ（Andrew Moray 生年不詳〜1297年）。前者は、ハリウッド俳優、メル・ギブソンが主演・監督を務めて大ヒットした映画『ブレイベーハート』でお馴染みだろう。2人は、1297年9月11日、スコットランドのスターリング郊外でスコットランド軍とイングランド軍が激突した「スターリング・ブリッジの戦い（The Battle of Stirling Bridge）」において、スコットランド軍を勝利に導いた。重装備のイングランド軍は、湿地帯で足を取られて機動力を減じられ、スコットランド軍に屈した。

この時、エドワード1世はフランスに遠征中だった。

「スターリング・ブリッジの戦い」での勝利は、イングランド軍をスコットランドから駆逐するほどの大勝利ではなかったものの、数や装備で圧倒的に優位にたっていたイングランド軍を破る画期的なもので、スコットランド人

敵に審判役を依頼

スコットランドを完全に支配下に置こうと画策するエドワード1世にまづ一矢を報いたのは、王権争いには直接には関係のない2人の騎士だった。一人はウイリアム・ウォリス（William Wallace 1270頃〜1305年）、もう一人はアンドリュウ・モーレイ（Andrew Moray 生年不詳〜1297年）。前者は、ハリウッド俳優、メル・ギブソンが主演・監督を務めて大ヒットした映画『ブレイベーハート』でお馴染みだろう。2人は、1297年9月11日、スコットランドのスターリング郊外でスコットランド軍とイングランド軍が激突した「スターリング・ブリッジの戦い（The Battle of Stirling Bridge）」において、スコットランド軍を勝利に導いた。重装備のイングランド軍は、湿地帯で足を取られて機動力を減じられ、スコットランド軍に屈した。

この時、エドワード1世はフランスに遠征中だった。

「スターリング・ブリッジの戦い」での勝利は、イングランド軍をスコットランドから駆逐するほどの大勝利ではなかったものの、数や装備で圧倒的に優位にたっていたイングランド軍を破る画期的なもので、スコットランド人



スターリング城前で、剣に手をかけてにらみをきかせるロバート1世の像。

見得のために裏切られた英雄

スコットランドを完全に支配下に置こうと画策するエドワード1世にまづ一矢を報いたのは、王権争いには直接には関係のない2人の騎士だった。一人はウイリアム・ウォリス（William Wallace 1270頃〜1305年）、もう一人はアンドリュウ・モーレイ（Andrew Moray 生年不詳〜1297年）。前者は、ハリウッド俳優、メル・ギブソンが主演・監督を務めて大ヒットした映画『ブレイベーハート』でお馴染みだろう。2人は、1297年9月11日、スコットランドのスターリング郊外でスコットランド軍とイングランド軍が激突した「スターリング・ブリッジの戦い（The Battle of Stirling Bridge）」において、スコットランド軍を勝利に導いた。重装備のイングランド軍は、湿地帯で足を取られて機動力を減じられ、スコットランド軍に屈した。

この時、エドワード1世はフランスに遠征中だった。

「スターリング・ブリッジの戦い」での勝利は、イングランド軍をスコットランドから駆逐するほどの大勝利ではなかったものの、数や装備で圧倒的に優位にたっていたイングランド軍を破る画期的なもので、スコットランド人

The Battle of Bannockburn Visitor Centre

バトル・オブ・パノックバーン・ビジターセンター  
※情報は2024年5月27日現在のもの。  
Glasgow Road, Whins of Milton  
Stirling FK7 0LJ  
www.nts.org.uk/visit/places/bannockburn



【館内展示オープン時間】  
1月3日〜12月21日 毎日10:00〜17:00  
※ショップ、カフェ（軽食のほか、スコーンやケーキ類なども楽しめる。なかなかレベルが高くおすすめ）は入場料を支払うことなく利用できる。

【館内展示入場料】  
大人 8.50ポンド  
シニア 7.00ポンド  
ファミリー・チケット 24ポンド  
National Trust for Scotland 会員 無料  
※完全予約制。1時間ごとのスロットが設定されている。

【パノックバーン古戦場跡】  
年間を通じて24時間オープン  
※入場料不要。犬の散歩がてら、歩いている地元の人も多い。

■パノックバーンの戦いの700周年にあわせて一大改装が行われ、各種CG、インタラクティブ展示など、ハイテクを駆使したアトラクションとして再オープン。それから10年。コロナ禍を経て、現在は完全予約制。館内スタッフによる45分ほどのガイドつきツアーで見学。短編フィルム、CG使用の展示なども組み込んだ構成で飽きさせないようにしている。内部の展示見学を終えたら、外に出て、パノックバーンを見渡すように立つロバート1世の雄姿の像=右ページのメインの写真、および12ページ左下の写真=を見るのを忘れなく。

■公共交通機関で訪れる場合、スターリング駅のそばのバスターミナルからX36/56番のバスで約10分。「Whins of Milton」バス下車。ここから徒歩約5分。バスの運転手さんに「パノックバーンのビジターセンターまで行きたい」と告げ、バス停に着いたら教えてくれるよう頼んでおくと安心。



▲スコットランドの地方都市、パース近郊のスクーン宮殿 Scone Palace (発音は「スクーン」である点にご注意を)。

▶同宮殿の敷地内に置かれた、『運命の石』のレプリカ(積み木のように置かれた石のうち、腰をかける部分)。スコットランド君主は代々、この石に座して戴冠した。エドワード1世により持ち去られてしまった本物の『運命の石』がウエストミンスター寺院からスコットランドに公式に戻されたのは、1996年のこと。現在はエディンバラ城に保管されている。



に誇りと自信を呼び戻したのだった。モーレイは残念なことに、この戦いで負った傷がもとで同年、没してしまいが、勢いにのるウォリスは、逆に北イングランドを攻め、スコットランドに展開するイングランド軍に揺さぶりをかける。だが、その命運は1298年、スターリングの南で繰り広げられた「フォルクークの戦い (the Battle of Falkirk)」であっけなく尽きる。自軍敗退の報を受けて激怒したエドワード1世は、フランス王フィリップ4世と講和を結び、急ぎ帰国。即座に反撃を開始し、ウォリスを追い詰めていったのだ。ここで、天はウォリスに味方しなかった。

なかったようだ。ウォリスの身分が低いとして、スコットランド貴族がウォリスに非協力的だったのである。フォルクークの戦場でも、騎兵の提供を約束したスコットランド貴族たちが裏切った戦わずして撤退。ウォリスの味わった悔しさと悲しみはいかばかりだったことか。フランスやバチカンに対し、援軍を要請するために大陸にわたったとされるウォリスだが、1303年に失意のうちに帰還。1305年8月、さらなる裏切りにあい、イングランド軍に捕らえられ、裁判の末、23日にロンドンのスミスフィールド(肉市場がある場所)で、引き回し・絞首の後四つ裂きという最も重い刑に処された。

### みずから戴冠した男

1298年の「フォルクークの戦い」での敗北を受けて「スコットランドの守護者 (Guardian of Scotland)」の役をウォリスが辞した後、この栄えあるタイトルを与えられたのはロバート・ザ・ブルースとジョン・カミン (John Comyn) だった。カミンは、エドワード1世の傀儡として即位した後フランスに追われたジョン・ペイリオルの甥である。ジョン・ペイリオルの権力争いに敗れた、ロバートの祖父以来、ブルース一族とペイリオル派との対立は因縁深いものとなっていた。カミンもロバートも、国王の座を争うこのレースで、相手を出し抜くため、表面上は、対イングランドで協力しあうように見せかけながら、様々な策を練っ

ていた。長らく膠着状態が続いたものの、それが崩れる時が突然訪れた。寒さの厳しいある冬の日、1306年2月10日のことだった。カミンとロバートは、ダンフリースのグレイフライアーズ教会で話し合いの機会を持つことになったのである。一説によると、ロバートがイングランド軍に対して決起した際にカミンが支援するという約束を密かに交わしたものの、その密約の内容をカミンがエドワード1世にもらしたことをロバートが知って激怒。その裏切りに抗議する目的でロバートがカミンを呼び出したとされている。ふたりは、教会の中で激論を交わし、やがて殴り合いに発展。ここでロバートは、教会内であったにもかかわらず、剣を抜き、なんとカミンを殺害してしまったのである。



▲スクーン宮殿内にある、戴冠式用の椅子のレプリカ。運命の石のレプリカが座席のすぐ下に組み込まれている。

◀チャールズ3世の戴冠式にも使われた椅子。石の設置箇所は空洞になっている。

この出来事は、ロバートの生涯の中で、後戻りのできないターニングポイントとなったことだけは明白だ。カミンを殺害してしまつた以上、道はふたつしかなかった。ひとつは罪人として逃げるか。もうひとつは、この罪を許すことのできる絶対権力を有する座にみずから就くか。後者はつまり、スコットランド国王に『なる』ことを意味した。ロバートは腹をくくった。カミン派の貴族が動く前に先手を打たねばならない。ダンフリースでの事件の6週間後、ロバートはパース近郊のスクーンで戴冠式に臨んだ。ウィリアム・ドゥラン・パートン司教の手により、正式に戴冠式を挙行。ロバートは、教会内で蛮行を働いた罪により、ローマ・カトリック教会からは破門されていたものの、この戴冠式にはグラスゴウの司教らも参列。さらに、ロバート支持の貴族たちが集い、門出を祝った。1306年3月25日、かくしてロバート1世が誕生した。しかし、ロバートの笑顔はさえなかった。頭上に輝く王冠の重みから伝わる喜びよりも、前途に横たわる難題への懸念のほうが大きかったからだ。スコットランド国王として認められるには、ロバートが武力闘争に勝つしかなかった。スコットランド国内の反対派をすべて鎮圧しなければならぬ。戦いに明け暮れる日々がこうして幕を開けた。パノックバーンにおける戦いの8年前のことだった。(後編に続く)



パノックバーン古戦場跡のシンボルといえる、ロバート1世騎馬像。